

岡倉由三郎の英語教育論に関する一考察

——「読書力」の養成に注目して——

澁谷 輝生

1. はじめに

本稿では岡倉由三郎(1868-1936)の英語教育論について考察する。岡倉由三郎は1894年から1936年頃に活躍した英語教育者である。

開国以来の、洋書の翻訳によって欧米文化を吸収することを目的としていた「英学」は、1890年代には衰退しており、訳読中心の教授法に替わって会話や発音などの音声を重視する新教授法が唱えられるようになった。音声重視の教授法が唱道された一因に、日本の近代化が挙げられる。1896年頃の日本では資本主義化・国際産業化が進み、特に商業界では日常英会話や商用英作文などの「実用英語」が重んじられるようになっていった¹。日本の近代化に伴って、海外との商業競争のために英語の会話作文能力、所謂実用英語が求められるようになったのである。この時期において、英語を教える・学ぶという営みは社会的要求が色濃く反映されたものであったと言えるだろう。

岡倉は1894年に『外国語教授新論』(開発社)を著し、訳読式の教授法から音声重視の教授法へと語学教授法を改正することを説いた。1906年以降は新教授法を説くと同時に英語教育の目的についても論じている²。岡倉は英語を教え・学ぶことの目的が社会的要求に応えることにありと自明視されていた時代に、改めて教育的視座から英語教育の目的を問い直したのである。

岡倉は実用のための英語を否定し、普通教育という文脈において中等学校の英語教育をとらえ直した。岡倉は、中等学校の英語科においては、英語を媒介として読書を軸に西洋知識の摂取を行う「実用的価値」と、新しく得た知識を材料に言語・文化の相対性を理解し、自らの思考力を養うことを目指す「教育的価値」の二価値を兼備すべきであると唱えた。岡倉は、これら二価値を追求することが英語教育の目的であるとし、これら二価値を実現する起点として英語科の技能上の目

標に「読書力」の養成を据えたのである。

岡倉の英語教育論に関する先行研究は、目的論の研究と教授法の研究に大別できる。目的論関連の研究では、新里真世が「実用的価値」と「教育的価値」の関係性を検討しており³、斎藤浩一が「実用英語」隆盛の時代に岡倉が「実用的価値」と「教育的価値」の実現および「読書力」の養成を唱えた思惟的原理を検討している⁴。教授法関連の研究では、金沢朱美が岡倉の新教授法の受容を検討しており⁵、伊藤健三が岡倉の発音や会話重視の教授法は4技能のバランスのとれた指導に示唆を与えるとして彼の卓見性を評価している⁶。

このように先行研究では、岡倉の英語教育の目的論においては技能上の目標に「読書力」が据えられていることが指摘されている。しかし、この「読書力」がどのような力であるかはいずれの先行研究においても明らかにされていない。そこで本稿では、岡倉の英語教育論における「読書力」の内実を明らかにし、彼の「読書力」養成の理論が反映された実践の検討を行う。これによって岡倉の英語教育論の再評価を試みたい。

2. 岡倉の英語教育論における目的論

まずは、岡倉の唱えた「読書力」が彼の英語教育の目的論の中にいかに定位されているのかを確認する。

(1) 教育学の学理に基づく立論

岡倉は、「本邦の中等学校の一科」としての英語科を対象として英語教育論を展開している⁷。岡倉は、商業学校などにおける実用速成を目的とした英語の教授についてではなく、中等学校の生徒に普通教育を行う一科としての英語教育について説いているのである。

こうした前提のもと岡倉は、中学校で外国語を教える目的を二つの面でとらえている⁸。一つは、対象とする外国語の一般的な形を理解しそれを運用する力をつけることで、これを岡倉は「実用的価値」と呼ぶ。も

う一つは、海外の知識を摂取し知見を広げることによって古くこり固まった考えにとらわれないようにすることで、これを岡倉は「修養的価値」あるいは「教育的価値」と呼ぶ。岡倉は、中等教育はこの二価値を兼備しなければならないという。岡倉が実用・修養という区分で目的論を展開した背景には、彼が明治中後期の教育学の学理に基づいて立論したことがある⁹。

当時の教育学者の溝淵進馬は「教育」という営みの構造について「教育の目的は如何にして之を達するべきかと云ふと、之には三つの方法がある。第一、教授。第二、訓育。第三、養護が即是である」と述べている¹⁰。「教授」は主に知育のことで、「訓育」は徳育、「養護」は体育のことである。これら知・徳・体を相互関連させて総合的に人間陶冶すなわち「人づくり」を行うことが「教育」なのである。こうした「人づくり」を理論化した教育学では「教育」と「教授」は異なる概念であり、「教授」は「教育」に包摂される概念である¹¹。

英語科は知育の一環として行われるため、この区分では「教授」に分類される。「教授」が有する目的と価値については、「実質的価値」と「形式的価値」を兼備することとされていた。「実質的価値」は、各学科特有の知識・技能を与えることで、「形式的価値」は、「実質」面の陶冶に伴う精神的諸能力の鍛錬のことを指していた。こうした区分は当時において一般的であり、さまざまな科目で「実質的任務」と「形式的任務」、「実用上ノ効用」と「心的修養上ノ効用」などの呼称で以って扱われていた¹²。若干の術語の違いはあったものの、その意味するところはほとんど同じであった。

岡倉が説いた英語教育の「実用的価値」と「修養的価値」という目的論は、こうした教育学における目的論と一致する。次に、英語教育の「実用的価値」と「教育的価値」においては、具体的にどのような知識・技能や精神的陶冶が期待されていたのかを検討する。

（２）英語教育の「教育的価値」と「実用的価値」

英語教育の「教育的価値」について岡倉は、「見分を広めて固陋の見を打破し、外国に対する偏見を撤すると共に、自国に対する誇大の迷想を除き、人類は世界の各処に、同様の働きを為し居ることを知らしむるが如きは、英語の内容、換言すれば風物の記事に依って得らるゝ利益で、又、言語上の材料、即、語句の構造、配置、文の連絡、段落等を究めて精察、帰納、分類、

應用等の機能を錬磨し、且つ従来得たる思想発表の形式、即ち母国語の外に更に思想発表の一形式を知りて、精神作用を敏活強大ならしむるが如き、以上は何れも英語の教育的価値である」¹³と述べる。つまり、英語教育の「教育的価値」は二つあり、一つは、英語で学ぶ内容すなわち外国の風物に触れて自身の知見を広げることによって、文化を相対的にとらえられるようになるなど柔軟な思考を得ることであり、もう一つは、母語とは異なる言語体系に触れることによって、言語の認識や思考力を錬磨することである。

しかし、こうした文化の相対化や言語認識の深化については英語に限らず他の教科でも学び得る。これについて岡倉は、「必ずしも英語を須つの要はない。故に英語が重きを置かれ吾人が多大の時間と労力をこれに払ふのは、其教育的価値よりは寧ろ、実用的価値によるものである」¹⁴と述べる。では、英語教育の「実用的価値」とはどのようなものであろうか。

岡倉は英語教育の「実用的価値」について、「或人はこれを〔中略〕専ら会話、次には作文を英語の主要なる方面であると解する様である。併し、是れは正鵠を得た解釈では無い」¹⁵と述べる。岡倉の意図した「実用」とは、とりもおさず英会話や英作文などの実務志向の言語運用のみを意味しているわけではない。岡倉は、「英語の実用的価値は〔中略〕、英語を媒介として種々の知識感情を摂取し「欧米の新鮮にして健全な思想の潮流を汲んで、我國民の脳裏に灌ぐ」とであると述べる¹⁶。この「実用的価値」において岡倉は、会話や作文を視野に入れつつも、特に読書を軸として欧米の文化を吸収することに主眼を置いている¹⁷。続けて岡倉は、その結果として「二者相幫けて一種の活動素を養ふこと」がなされるという¹⁸。つまり、英語教育の「実用的価値」では、英語を通じて直接的に欧米の文化に触れて様々な知識や思想・感情を学ぶ取組に主眼が置かれており、新しく学びとった知識や思想は、日本人が従来から持つそれと並置されるのである。その上で、文化の相対化や言語認識の深化、すなわち「教育的価値」の実現が期待されるのである。

当時の教育学においては教科の知識・技能の習得を通して精神的諸能力の発達が目指された。これと同様に、岡倉の英語教育の目的論においても、「実用的価値」の実現を基礎として「教育的価値」の実現が連続的、

統一的に目指されていることがわかる。

(3) 英語教育の「実用的価値」における「読書力」

岡倉は、「英語教授の目的たる実用方面は果たして如何なるものかと云ふと、此れに対しては自分は猶予なく読書力の養成と云ふ事を以て答へるのである」¹⁹と断言し、さらに「読書力」について次のように説明する²⁰。「読書は凡ての要素の総和」で、英語の全ての分科の能力が動員される。特に発音や文法の知識を正しく身につけていなければ、「読書力」は身につかない。逆に、「読書力」が一通り備っていれば、必要に応じて話したり書いたりすることは困難では無く、「読書力」が会話作文の基礎」を成しているのだという。これを踏まえ、教授では「読書を中心として会話や作文を此に附属せしむべき」だという。つまり、「読書力」は英語科全体の基礎を成す能力である。岡倉はこれを「如何なる方向に向つても努力を加えさへすれば応用し得る、一種の素養を造るに外ならぬ」²¹のだという。

中等学校は、「男子に須要なる高等普通教育を為すを以て目的」²²としている。教育行政界の大御所であった澤柳政太郎は、中学校には将来「百般の業務に就く者」が混在しているため、「教授」の内容に、特定の職業に対する直接的な実用性を求めることは適切ではないとしていた²³。様々な学生を対象に普通教育を施す場である中等学校で求められる実用性は、必然的に間接的・素養的なものにならざるを得ないのである。

英語教育の「実用的価値」の中心的位置にある「読書力」は、広く一般の人にとって海外文化の摂取に役立つ技能であり²⁴、「教育的価値」の実現に与するものでもある。かつ、この「読書力」は会話作文の基礎であり、努力次第で十分に話し書くこともできるようになるので、実務志向の人にとっても意味のある力である。岡倉が「読書力は実用方面に最重要」²⁵と認め、これを「一種の素養」として英語教育の目的の中心に定位したことは、普通教育という文脈においてその目的と矛盾するものではなかったのである。

3. 岡倉の英語教授理論における「読書力」

(1) 各分科の関係と「読書」の位置づけ

岡倉は、分科の連絡と関係を理解することは英語を教授・学習する上で不可欠であると言う。岡倉はこれについて、彼の言語観を交えて次のように説明する²⁶。

言語の主体は思想を音声によって伝達する「口語」であり、これを文字に写したものが「文語」である。岡倉は言語にとって音声は文字に先立つと考えていたため、英語を学ぶということは、英語の話された形を学ぶことであるととらえていた。

口語で思想の疎通を行うことは「会話」という行為であるという。会話で、自分の思想を発信することが話方であり、受信することが聴方である。会話で口述するものを、音声のかわりに文字によって伝えることは、「作文」という行為である。作文では、文字や配列、綴方(スペリング)、句読法の知識が要されるが、これらを運用することを書方という。

岡倉は、英語の書籍を読むことすなわち「読書」という行為は、文語を口語に直し、そこに内在する思想を受けとることであるという。これを岡倉は、「文字と云ふ符号を目安として、先方の云ふ通りに抑揚発音の有様を、口頭で真似て〔中略〕裡に伏在せる思想を、先方の注文通りありありと再現する」²⁷ことであり、作文を行うのと逆の手順を辿るようなものであるという。つまり「読書」とは、読み手が書き手を想起し、文字で書かれた文章は書き手によっていかに語られ得るのかを考慮してそれを音声に復元して、そこにある思想を汲み取ろうとする試みなのである。読み手が書き手に代わって、自らに語って聞かせることで、文章の意味内容を理解しようとするのである。この文章を音声に復元することを岡倉は読方と呼び、文語で伝えんとされている思想、すなわち文の意味を理解しようとすることを解釈としている²⁸。

「読書力」の養成を目指すに際して、「読書」は会話(話方、聴方)や作文(書方)とも関連する能力であるため、会話や作文などの教授も大切となる。旧来は、作文は作文の授業で、会話は会話の授業でというように分科毎に別々に教授が行なわれていたが²⁹、岡倉は、「読書」と親和性の高い読本教授を中心に各分科を連絡させて教授を行うべきであるとした³⁰。

以上のような岡倉の「読書」観は、訳読重視で音声の方面には注意が向けられなかった英学の時代のそれとは対照的である。岡倉が音声第一主義のもと各分科の関連をとらえなおして読みの概念を拡張し、併せて分科の連絡を意識した教授を行うことを唱えたことは、当時において先進的であったと言えるだろう。

(2) 岡倉の英語教育論における「読書力」の内実

岡倉は「読書力」には二つの要件があるという。一つはある程度まで正確に読むことで、もう一つはある程度まで敏速に読むことである。岡倉は、「読書力の養成は直読直解にある」³¹と断言する。正確かつ敏速な「読書力」は「英語を所謂直読直解するに依りて、始めて達せられる」のであり、さらに「此の直読直解に達せんには、先ず其の発音が正確で、其国語本来の面目を鮮明に發揮したもので無ければなら」ず、また「目にての了解の敏速は、根本的な耳にての了解の敏速に基づくので、従つて発音の正確の必要なるも極めて明瞭なる次第である」と述べる³²。

つまり「読書」という営みには、文字を音に還元する手続き（読方）と、音声や文字を通してその意味を理解する手続き（解釈）の二つが併存しており、これらの前提として発音の正確さと十分な聴方の能力が重要とされている。これら手続きを正確かつ敏速に行うことができる「直読直解」の域に達してはじめて、岡倉の言う「読書力」は実現されるのである。以上のことから、「読方」と「解釈」の両者に注目することで、岡倉が直読直解の「読書力」の養成をいかに構想していたかに迫ることができると考える。

① 予備的訓練について

岡倉は、「外国文を日本流に発音してゐる間は、発音者の心持が外国流の『乗り』を得ぬ」ため、入門期に「予備的練習」を行うべきであるとしている³³。読本教授の前提として、耳で音声を聴き覚え、充分にそれを発音する訓練が行われる。発音器官の運用に一定習熟して漸く読本教授へと移行することになる。

① 読方について

岡倉は、読方において最も重要なことの一つはアクセントであると述べる³⁴。岡倉は単語のアクセントには二種類があるとしており、一つは、中国語の四声のような音の高低を意味する音楽的アクセントで、もう一つは、力の強弱を主とする英語などのアクセントである³⁵。こうした単語のアクセントは、辞書に拠って正確に学び、常に正確さを意識して読む習慣をつけるべきとされている。単語単位で正確な発音ができることが期されていることがわかる。

これに加えて岡倉は、文中の単語間の関係によって生じるアクセントがあるという。文章が複数個の単語

で構成されるとき「各語はそれ自身のアクセントに止まらず、文章中の他の語との比較上の音の抑揚」があり、これを岡倉は文章中の音調（Sentence Intonation or Stress）と呼ぶ³⁶。一般的な発音教授では、個々の単語のアクセントと文章の分子としての単語のアクセント（音調）とを混同して教授されることが多いが、岡倉はこの両者は必ず区別して教授しなければならないという³⁷。岡倉は、発音教授ではまずは教師が範読を行い、それを手本として漸次練習させるべきであり、文章全体をまとまりとして総合的に発音抑揚を教えた後に、単語個々の発音を教えることが適当であるという。

聴方においては音調の在り方は相手の話し方や読み方から判断できるが、「読書」における読方では文章中の音調はいかに判断して読んでいけばよいのだろうか。岡倉は、発音上重要なことは、「一つの文章の上から観て、[中略]其文章を組立てる単語に軽重の差異を熟知することである」³⁸とし、この単語ごとの軽重の差については、「文章中の意味上より判断すれば、其語の文の中の単語に於ける軽重の別は、自然判定することが出来る」³⁹と述べる。つまり、文あるいは文章全体の意味から見て強調される事柄に対応している単語が相対的に重くみなされ、音調としてはそれが強く読まれるのである。次は、解釈について検討を行う。

② 解釈について

岡倉は、「或る意味[ココロ]を発音と云ふ形式に含めたもの、即ち言語を耳に聞いて、其中に含まれたる意味を思ひ浮かべること」を聴取とし、続けて「若し其意味が文字と云ふ符号を仮りて、文章として書き表はされたる時には、目に訴へて同様の手順を行ふ其が、則ち解釈である」と述べる⁴⁰。音声言語を耳で聴いてその意味を解するのが聴取であり、文字と目によって同様の手順を行うのが解釈である。

岡倉は、解釈においては次の四つを押さえるべきであるという⁴¹。①単語のそれぞれについて辞書に示されるような意味を把握すること、②それら単語の文法上の関係や文における配列などを把握すること、③全体の意味から判断して文の焦点を見極め、これに適応を施して原文の「心もち」を汲み取ること、④原文の「心もち」を理解した上で、再三再四正しい抑揚で原文を音読すること。中でも、文章全体の意味を主として、その文を構成する単語の個々の意味に拘泥し過ぎ

ないよう注意すること（すなわち③全体の意味から文の焦点を判断して原文の「心もち」を掴むこと）が重要であるという。

読方同様に、解釈を行う場合にも文章全体を斟酌し、単語の意味の軽重に目を向けることが重要であると岡倉は考える⁴²。こうした意味の軽重について岡倉は、各文には必ず意味の焦点というものがあるという⁴³。次の二つの例から焦点について考える。I bought three books yesterday.という文では、いずれの単語にも焦点を置くことが可能で、焦点の定め方次第で文の意味が異なってくる。たとえば、I に焦点を置けば「他ならぬ私が」の意味で、bought に焦点を置けば「借りた、売ったとかではなくて、買った」ことを意味するという具合である。次に、An old man is cutting the branches. He cuts them with a pair of scissors.という例では、前文は「木の枝を切っている最中だ」という意味で、今行っている動作に焦点が定められており、進行形が用いられている。一方後文では、「鋏を用いて切っている」というので動作は確かに「切っている」のだが、その動作は既に前文で述べた所であり、ここでは道具の方に焦点がある。本来は後文でも現在進行形が用いられるべきところであるが、動作よりも道具が重く見られたために、動詞には注意が払われずに現在形となっている。岡倉は、このような書き手の言わんとする意味の微妙さやニュアンスを、原文の「心もち」などと呼んでいる⁴⁴。重く用いられた単語すなわち焦点の定められた単語は特に注意してその意味を汲み取って適訳を考える必要がある。また例文から、「心もち」は、語の意味を強調するだけでなく、文の構造にも影響を与えていることがわかる。

このような文の焦点のことを岡倉は「意味上のアクセント」⁴⁵とも換言している。聴方では音調の様子から焦点を判断できるが、文章を読む場合は、意味の関係上重要な箇所つまり相手が言わんとする「心もち」に関係の深い場所に焦点が置かれる。そのため、文章全体の意味や、文の構造、前後の文との関係に注目することで焦点の所在を把握することができるのである。

全体の意味が重要であるからといって、文を構成する個々の単語を粗略に扱ってもよいというわけではない⁴⁶。全体の意味を知るためには、まずは各単語が文の中でどのような意味を持ちどのような働きをしてい

るか、すなわち上述の①個々の単語の意味や②各単語の文法上の関係や配列を明確にしておく必要がある。

岡倉は、日本人が外国人のように原文を一読してその「心もち」を把握することは難しいと考える。日本人と外国人で「彼我風俗人情等大に異なる」⁴⁷ためである。岡倉は、原文の「心もち」をよく解釈するには、外国人の言語感覚や思考様式に即して直接的に意味を解するようになる必要があるという⁴⁸。これを実現するには「英語の本体は話されたる形、即ち発音抑揚にあるのだから、全文の意味を了解した後は〔中略〕反復読方を練習せしめ」るのが良法であり、「斯くして始めて抑揚緩急の工合を充分了解することもでき、英語の語感〔コツ〕にも通ずることを得る」⁴⁹のである。つまり、適訳を通して原文の意味を理解した後に正しい発音抑揚で反復して音読練習を行うことが肝要なのである。これが④で解釈においても音読が重要とされる理由である。

③読方と解釈の関連から見る「読書力」

読方は自ら音読することで音声の面から原文の意味に接近することであり、解釈はこれを意味の面から行うことであった。重い意味で用いられる単語は重く発音され、軽い意味で用いられる単語は軽く発音されることから、音調の置かれる場所と解釈における焦点の所在は符合すると言える。読書において正しい音調で音読ができれば、焦点を見定めた解釈ができるであろうし、逆に、原文の意味をよく理解できていれば原文を談話の体に再現することも困難ではないだろう。

岡倉の構想した「読書」とは書き手を想起し、原文の意味に対して音声の側面からのアプローチと意味の側面からのアプローチを同時に行うことであり、「読書」において読方と解釈は、相手の「心もち」を汲み取る行為として表裏一体の相補関係を成しているのである。こうした読方と解釈の密接不離な関係を岡倉は、「元来訳即読読即訳で、両者は恰も形と色との如く、形無ければ色なく、色無ければ形無し」⁵⁰と形容する。

読方と解釈は一体であるため、岡倉は「解釈は、決して原文の意味を理會するだけに止まらず、読むと共に其意味が心に通ずる」ことを目指して「反復読方を試みしめねばならない」と述べる⁵¹。再三再四の音読練習によって「相離れたる読方解釈の両者は、此処に相結んで一団と為つて活用するに至る」⁵²のである。

さらには解釈の項で確認した通り、この反復練習は音声と意味とを対応させることから一歩進んで、「語感（コツ）」や「心もち」などと表現される外国の言語感覚や思考様式に接近することも可能としている。こうした外国の心性とも呼べるものを解することで、より直接的に読方や解釈を行うことが可能になるのである。

以上から、繰り返し音読練習を行うことで、まるで外国人が読むかのように一読して直ちに読方と解釈の処理を即時的・並行的に行うことができるようになることが、すなわち、反復と帰納によって読方と解釈を自動化の域に押し上げることが、直読直解の「読書力」を養成することであると言えるだろう。

4. 岡倉の英語教育論に基づく「読書力」養成の実践

岡倉の理論に基づく実践として、松本鍾一『英語教授の実際』（1939年）に見られる教授案（表1）を検討する⁵³。『英語科教授の実際』は松本を代表とした広島高等師範学校附属中学校英語科の共同研究案である⁵⁴。松本は、中学校英語科の目的は「岡倉由三郎氏の所謂読書力を〔中略〕養成する」⁵⁵ことだと述べている。

（1）広島高師附中における岡倉の英語教育論の受容

広島高師附中の英語教授の目的は、英語の了解（読む、聞く）と発表（書く、話す）の能力を身につけて英語の知識および英語話者との疎通手段を与えることと、海外の風物（人情、風俗、国情）や、それらの自国との異同について正確な認識を与え、多様な思想に接することで豊かな国民性を養うことである⁵⁶。英語の知識技能を教授しつつ、海外の風物から文化の相対性などへの認識を深めることを目指している点は、岡倉の「実用的価値」・「教育的価値」に類似している。

英語の知識・技能の教授について松本は、「分科の統一を図り」「読書本位によりて努めて直読直解に導く」こととしている⁵⁷。ここでいう「読書」について松本は、人から話してもらい代わりに、自分の声で自らに話し聞かせることであると述べており、彼が岡倉の「読書」観を正しく理解していることがわかる。

（2）指導過程の検討

岡倉は読本教授の授業について次のように述べる⁵⁸。始め10分で前時の文章について問答を行い、終わりの5分で教師が最低でも一回は原文を朗読する。これらの時間に生徒に原文の意味とその読方を合致させて、

聴くと同時に意味を了解するよう努力させることで、「読書力」は確実に伸びるのだという。松本の指導案では第一段と第三段階がこれに相当するが、本時の教授案は岡倉の企図した通りの展開ではない。ただし、広島高師附中の教授要目では、第一段で前時教材について暗誦や問答を行い、第三段で教師が範読し生徒も数回音読することになっている⁵⁹。文法の復習や会話作文の練習を行う等の実際的な必要のために教授方針と教授案は必ずしも一致したわけではないようである。本時の指導過程では、第二段が「読書力」の養成に関

表1. 広島高師附中 第三学年 英語科 読本教授案

（松本『英語科教授の実際』pp. 27-29より引用。内容を損わない範囲で筆者が編集した。）

第三学年〇組英語科読本教授案

◇教材

GENTLE MANNERS (..... Readers Book III Lesson 13, pp.67-71)

本時(全5時間中の第1時間目)ではpp. 67-68を扱う。

(第2~4時ではpp. 68-71を扱い、第5時では総復習、書取などを行う。)

◇教授要項

(1) 新語: well-bred, refined, unselfish, needlessly, rule, whatever, ye.

(2) 解釈、文法

What do you think of when we hear the word *gentleman*? / A good way to learn..... is to watch / it (your heart) is sure to tell you what to say and do at all times. / your heart will tell you to think / It will tell you never needlessly to hurt / think of & remind --- ofとの関係。

◇教法(本時の指導過程)

第一段 復習 (約10分)

- (a) 宿題(英作文)を板書せしむ。
- (b) 同時に他生に就いて英語にて問答。
- (c) 宿題の協同訂正。

第二段 教授 (約35分)

- (a) 原文を適宜省略或いは改変して聴方を行ふ。
- (b) 了解確実と認めたる時は直ちに複文を行はせる。
- (c) 教師範読。(本を開かせて)
- (d) 新語の発音を斉誦練習。
- (e) 自由読一回(この間、教師は必要事項を板書す。)
- (f) 指名読一回 — 各節毎に行ふ。
- (g) 指名読並に訳 — 各節毎に行ふ。
- (h) 教師、要点を生徒と共に共同研究。
- (i) 各自に今一度通読せしむ。

第三段 練習、整理 (約5分)

- (a) 次の聴方を行ひ、直ちに複文せしむ。
(①The word *wool* always reminds us of Australia. ②The best way to learn a foreign language is to go to the country where it is spoken.)
- (b) 前者は尚 think of を使って Paraphrase させる。
- (c) 要点に下線を引かしむ。
- (d) 宿題提示。(①外国語を習ふ最上の道はその国語の話される国に行くことである。②此の本を見るとアメリカにゐる叔父を思ひ出す。)

◇本文(本時で扱う範囲)

GENTLE MANNERS

What do you think of when we hear the word *gentleman*? We think of a man of gentle manners, a well-bred, refined man. And we know that a lady is a gentle, refined woman.

A good way to learn gentle manners is to watch what well-bred people say and do; but a better way, yes, the very best way, is this: to try to be kind and unselfish. If your heart is right, it is sure to tell you what to say and do at all times.

I know that your heart will tell you to think of the people of other people as well as your own. It will tell you never needlessly to hurt the feelings of any one. Your heart will remind you of the Golden Rule, "Whatsoever ye would that men should do to you, do ye even so to them."

わる部分である。全体的な構造として、はじめにおおまかに文章の読み方と内容をとらえ、次に範読や単語の発音練習で読み方の確認と音読練習を行い、続けて訳や要点を確認し、最後に改めて音読練習をするという形式である。意味を解した後に正しい読み方で音読練習を繰り返すという岡倉の直読直解の「読書力」養成の理論を体現した授業構成であると言える。

個別の指導過程では、第二段(a)が重要な役割を果たしていると考えられる。(a)の読み聞かせは、パラフレーズを行うことで英語を英語のままに解することを可能にしており、(b)、(c)との一連の指導で、音声と意味の両面から原文の意味内容に接近することを最も可能にしている。(a)でおおよその音調の在り方や文章の大意を掴むことは、その後の音読練習や邦訳の際に一助となるだろう。(a)は読方と解釈の二面性を有している点で岡倉の「読書」観を体現していると同時に、(a)での理解が以後の指導全体の土台となっている。この(a)を核とする本教授案の第二段は、岡倉の「読書力」養成の教授論を具体化した指導の一例を示していると言える。

ただしこの実践については課題点を二つ指摘しておきたい。一つは、読方が教師の技量に依存することである。もし教師が発音などの心得がなければ、先ほど重要であると述べた第二段(a)の時点で、音声の方面から原文の意味へ接近することを促すのは困難となってしまうだろう。

もう一つは、「教育的価値」についてである。広島高師附中においても岡倉の「教育的価値」に通ずる目的が掲げられ、風物教授等を行うことされていた。本教授案における教材は海外風物を示すに足るものであるが⁶⁰、それをいかに扱うかは詳述されていない。言語や文化の相対性について、意識的に教授が行われないのであれば、「教育的価値」の実現は偶発的学習になっていると言える。これは岡倉の理論にも通ずる課題であり、「教育的価値」実現の具体的な到達目標や評価規準、教授方法などが不明瞭であると指摘できる⁶¹。

5. おわりに

岡倉の唱えた「読書力」とは、一読して直ちに音声と解釈の両面から原文の意味に迫る力であった。書き手を想定して音読し自らに読み聞かせるという点で身体性を伴っていると言える。洋書を読むといえば訳読

一辺倒であった当時において岡倉は読みの概念を拡張したと評価することができる。

岡倉は、「読書力」を英語科の基礎的・総合的な力ととらえ、読本教授を基として、文法や作文、会話など各分科を関連させて教授することを目指した。岡倉の「読書力」を中心とした能力観や教授論は、伊藤が指摘する通り⁶²、4技能のバランスの在り方やその指導を考える際に参考となるだろう。

広島高師附中の実践の検討より、「読書力」の養成を中心とした教授では、全体として読みと意味を理解した後に音読練習を繰り返す授業展開となっており、特に原文をパラフレーズしたものを読み聞かせることが読方と解釈に対して重要な役割を果たしていることがわかった。こうした教授法は、英語を英語のまま直接的に理解する直読直解の「読書力」の養成に与する。これは、今日の英語教員が「英語の授業は英語で行う」⁶³にあたって一つの具体的方法を示していると言えるだろう。

2002年に『『英語の使える日本人』育成のための戦略構想』が出されて以降は、財界人や政治家によってコミュニケーション能力を重視した英語教育政策が推し進められてきている。上述の「英語で授業」もこの流れに倣うものである。こうした動向には、一部のエリート育成にのみ焦点を合わせて英語がビジネス実利のための道具・技能に矮小化されることで、学校教育の本質が歪められているという批判もある⁶⁴。

こうした今日の状況を踏まえると、岡倉が実務志向の「実用英語」を否定して教育的視座から英語教育をとらえなおしたことは注目に値する。岡倉が技能上の目標として掲げた「読書力」は会話作文の基礎であり、かつ、「教育的価値」につながる力であった。「読書力」を養うことによって、会話作文の素養として所謂「実用」的な要求を満たしつつ、読書を軸として言語・文化の相対性を知り思考力を鍛えることは、英語を学ぶ多くの生徒にとって価値があるだろう。

一方で、岡倉の英語教育論は、「読書力」を中心とする「実用的価値」から連続して「教育的価値」の実現を目指していたが、実践においては「教育的価値」を実現するための具体的な教授法は十分に示されていない。この点を岡倉がどのようにとらえていたのかを明らかにすることを今後の課題としたい。

- ¹ 神田乃武「中学校に於ける英語」『太陽』2巻4号、博文館、1896年、p. 236。
- ² 岡倉由三郎「本邦中学校における外国語教授についての管見」メリー・ブレブナ『外国語最新教授法』大日本図書、1906年。以下、「管見」と記す。岡倉の『英語教育』(博文館、1911年)は、目的論、教授論、教師論などを英語教育史上はじめて体系的に扱った著作であり、後の英語教育界の方向付けの役割を担った。
- ³ 新里真世「英語教育における『教育的価値』について」岡倉由三郎の英語教育理論に注目して『関西教育学会紀要』26号、2002年、pp. 61-65。
- ⁴ 斎藤浩一「岡倉由三郎再考：その英語教育目的論の背後にある原理」『日本英語教育史研究』27号、日本英語教育史学会事務局、2012年、pp. 1-30。
- ⁵ 金沢朱美「岡倉由三郎におけるオレンドルフ教授法の受容の考察」『日本語と日本文学』44号、筑波大学国語国文学会、2007年、pp. 1-12。
- ⁶ 伊藤健三「岡倉由三郎の英語教育論：その『英語教育』(1911)の今日的意義」『英米文学』43号、立教大学文学部英米文学研究室、1983年、pp. 1-8。
- ⁷ 「管見」、pp. 1-2。
- ⁸ 「管見」、p. 10。岡倉由三郎「英語を通しての教育(断想)」(岡倉由三郎『英語教育』研究社、1937年、p. 394)。
- ⁹ 斎藤、前掲論文、pp. 12-16。内丸公平『『新事物を教ふるに当たりては必ず既に知れる事物と比較し』：岡倉由三郎『外国語教授新論』に於ける英語教授法とその教育的背景』『国学院大学紀要』52巻、2014年、p. 71。
- ¹⁰ 溝淵進馬『教育学講義』富山房、1909年、p. 97。
- ¹¹ 森岡常蔵『教育学精義』同文館、1906年、p. 83。
- ¹² 澤柳政太郎『実際の教育学』同文館、1909年、p. 227、p. 236。ならびに、斎藤、前掲論文、pp. 14-15。
- ¹³ 岡倉由三郎『英語教育』博文館、1911年、p. 39。以下、『英語教育』と記す。
- ¹⁴ 同上書、pp. 39-40。
- ¹⁵ 同上書、p. 37。
- ¹⁶ 同上書、p. 40。一部圏点を省略した。
- ¹⁷ 同上。
- ¹⁸ 同上。一部の圏点を省略した。
- ¹⁹ 同上書、p. 41。
- ²⁰ 岡倉由三郎「英語教授法一班」中等教科研究会編『中等教育教授法』育成会、1910年、p. 118。ならびに、『英語教育』、pp. 41-42を参照。
- ²¹ 『英語教育』、pp. 38-39。一部の圏点を省略した。
- ²² 文部省「改正中学校令」1899年。
- ²³ 澤柳、前掲書、pp. 161-163。
- ²⁴ 当時は記者や通訳などの一部の人々を除き、一般の人が英会話や英文文によって利益を得る場合は少なかった(『英語教育』、p. 42)。
- ²⁵ 「英語教授法一班」、p. 118。
- ²⁶ 『英語教育』、pp. 61-67。
- ²⁷ 同上書、p. 63。
- ²⁸ 同上書、pp. 66-67。
- ²⁹ 外山正一『英語教授法』大日本図書、1897年、pp. 20-21。『英語教育』、pp. 44-45。
- ³¹ 「英語教授法一班」、p. 120。
- ³² 『英語教育』、p. 43。
- ³³ 「管見」、pp. 24-25ならびに、『英語教育』、p. 56。

- ³⁴ 『英語教育』、p. 92。
- ³⁵ 同上書、pp. 96-98。
- ³⁶ 同上書、pp. 96-97。
- ³⁷ 同上書、pp. 101-102。
- ³⁸ 同上書、p. 103。
- ³⁹ 同上書、p. 105。
- ⁴⁰ 同上書、pp. 107-108。一部の圏点を省略した。原文では「意味」に「ココロ」とルビ。
- ⁴¹ 岡倉由三郎『外国語教授新論』開発社、1894年、p. 27。以下、『外国語教授新論』と記す。『英語教育』、pp. 106-108。岡倉由三郎「英語教育」岩波茂雄編『岩波講座 教育科学 第八冊』岩波書店、1932年、p. 19。以下、「英語教育」と記す。
- ⁴² 『英語教育』、pp. 108-109。
- ⁴³ 同上書、p. 110。ならびに「英語教育」、pp. 17-21。
- ⁴⁴ 岡倉は、「趣意」(『英語教育』、p. 20)、「心もち(心持)」(『英語教育』、p. 64、p. 116)、「真趣」(『外国語教授新論』、p. 27)とも換言する。
- ⁴⁵ 『英語教育』、p. 113。
- ⁴⁶ 「英語教育」、p. 21。
- ⁴⁷ 『外国語教授新論』、p. 27。
- ⁴⁸ 同上。
- ⁴⁹ 『英語教育』、pp. 92-93。原文では「語感」に「コツ」とルビ。
- ⁵⁰ 同上書、pp. 119-120。
- ⁵¹ 同上書、p. 119。原文ママ。
- ⁵² 同上。
- ⁵³ 松本鍾一『英語科教授の実際：教材の類型より見たる』東京開成館、1939年、pp. 1-86(江利川春雄監修・解題『英語教育史重要文献集成 第4巻 英語教授法3』ゆまに書房、2017年、pp. 8-14)。以下、『英語科教授の実際』と記す。なお、「広島高等師範学校附属中学校」は以下、「広島高師附中」と略称する。
- ⁵⁴ 『英語科教授の実際』は、教科毎に発表された中等教育討議会『中等教育に於ける各科教授の原理と実際』(東京開成館、1939年)のうちの一冊である(『英語教育史重要文献集成 第4巻 英語教授法3』の解題を参照)。
- ⁵⁵ 『英語科教授の実際』、p. 3。
- ⁵⁶ 同上書、pp. 1-2。
- ⁵⁷ 同上書、p. 3、pp. 30-31。
- ⁵⁸ 岡倉由三郎「参観私言」『英語教授』5巻、1911年(大村喜吉ほか編『英語教育史資料第2巻：英語教育理論・実践・論争史』東京法令出版、1980年、p. 404)。
- ⁵⁹ 『英語科教授の実際』、pp. 25-26。
- ⁶⁰ この教材は岡倉編集の読本教科書 *Ocean Readers Book III*(大日本図書、1925年)にも収録されている。
- ⁶¹ なお「実用的価値」(読書力)について、教授論は『英語教育』等で厚く論じられており、評価は、最終的に5年生の最後に4年の教科書が1時間で5、6ページを直読直解できる程度を目指すとして、到達目標的な基準が示されている(『英語教育』、p. 46)。
- ⁶² 伊藤、前掲論文、p. 25。
- ⁶³ 文部科学省「学習指導要領・外国語」2008年、など。
- ⁶⁴ たとえば、江利川春雄「学校の英語教育は何を目指すべきなのか」江利川春雄ほか『学校英語教育は何のため?』ひつじ書房、2014年、p. 33、など。

(修士課程)

受理 2019年3月13日